



# 男は 痛い !

國友万裕

第18回

さよなら溪谷

## 1. 前例のない人生

俺が登校拒否になったばかりの頃だ。母と一緒に市民講座に行った。心の問題についての小さな講座だった。その時の講師だった先生は、30くらいの男性だった。京都から来ているとのことだった。おそらく、あの当時、あの年齢だったということは、学生運動がたけなわだった時期に大学生活を送ったのだろう。髪はやや長めで、細身の人だった。

その時の講座の内容は、「心を変えることで、思わぬ力がわくのだ」というような内容だったと思う。メンタルパワーである。自分で自分の心に暗示をかけて、俺はパワーがあるんだと思こませるとい話。今で言えば、ポジティブ・シンキングということだろうか。当時は、悩んでいても、まだ神経科の敷居は高かった。カウンセリングもほとんどなかった。藁をも掴む思いだった俺と母は、講座が終わった後、その先生に個人的なカウンセリングをしてもらえないかと頼んだ。そして、その翌日、その先生と3人で面談することになった。

当時、俺が学校に行かれなかった、直接的な困難の一つは、スポーツが人並みはずれてできないことだった。

「身体が大きいので、体力があるんだと思われて、なぜ、これくらいのことができないのか」と怒られるんです。

「身体が大きい・小さいなんて、運動神経と関係ないよ。私もスポーツはできなかった。でも、私は逃げなかったよ。恥ずかしい思いをしたけど、がんばった」

その先生は繊細で、優しい人だったのだが、

ここがこの先生の限界だった。「私も頑張ったんだから、君も頑張んなきゃ」こういう返し方をしたら、子供は余計に追い詰められることになる。今の社会の価値観で考えるならば、威圧的な暴言で、できない子の自尊心を傷つける先生に問題がある。暴力的なパワーハラスメントである。ところが、当時はまだ不登校という言葉もなく、子供の人権という言葉もなく、議論が煮詰まっていなかったため、先生のいうことには絶対我慢して従わなくてはならないという社会通念のほうに重みがあり、傷付いた子供の目から教育を見ようとする視点がなかったのだった。

それから2年後、俺は大検を目指して勉強していた。母は宗教に頼るようになり、当時、母が熱心に通っていた宗教団体に話を聞いてもらいに行ったことがある。その時、母の通っていた教区が一番上の女性が、こういった。「もう一度、高校を受験して、高校に行かれることをお勧めします。ちゃんとプロセスを踏んでいかないとうまくいきません」

そのおばさんは、その時俺と初対面。俺がどういう性格なのかもわからない、どういう経緯で学校に行かれなくなったのかもわからない、俺の心理状態もわからない、ただ、当時は大検なんて全然知られていなくて、高校は行くのが当たり前という考えがあったため、高校はいくべきものと決めつけてかかっていた。その当時、俺は17歳。それから高校を受けなおしたとしたら、18で高校一年生ということになる。確かに大人になれば、3年くらいの年の差があっても対等につきあえる。しかし、高校生くらいの子にとって、3年というのは大きなギャップである。学校で浮いた存在になることは目に見えている。彼女は、そう

いう事情も推し量ろうともせず、ただ社会の大勢に合うか合わないかのみで、よし悪しを判断しているのである。

俺は先駆的な不登校だった。先駆者というのはつらい。前例がないことは大それたことと人は思うのだ。世の中変わっていくのだ。歴史に残る偉大な人たちは、いつだって、世間の常識にはないことを成し遂げたからこそ、偉大とみなされるのに、なぜ、前例のないことを人は偏見の目で見るとだろうか????

俺は、今でも履歴書を書くのがつらい。俺はサンプル通りの履歴を歩んでいない。俺は規格外なのだ。俺の人生は孤独な人生だった。痛恨の思いを抱えたまま俺は、いつしか50代になった。

## 2. 自己肯定感の欠如

今から、もう15年ほど前のことだ。37歳の頃、俺は、公立の心の健康増進センターで、法律相談を受けたことがある。俺はその当時、激しい強迫症に悩んでいた。すでに心療内科にも何軒も通い、カウンセラーにも何人もついていたが、不安症は治らず、万一、心配が現実になったとしたら、どれくらいのことだったら法律的に許されるのかを知りたかった。藁をもつかむような思いだった。おそらく、俺のような理由で相談に来る人はいないのだろう。男の弁護士さんが相談に乗ってくれたのだが、「漠然とした問題ですねー」と言われた。

「ちょっとしたミスでクビになるんじゃないかという心配があるんです。どれくらいのミスだったら、法律的に許されるんでしょう

か」

「人間ですからね。例えば答案を一枚なくしたとか、それくらいのことは大丈夫だと思いますよ。学生を殴ったりもしない限りは、大丈夫だと思うんですが……」

「出席簿が盗まれるんじゃないかと思って、机の鍵のしまる引き出しにしまっているんです。それでも心配なんです」

「出席簿なんて、普通は盗まれないものなんですよ。」

確かにそうだろう。学生の答案やら、出席簿は個人情報なので、俺はどうしても管理に神経質になる。とはいっても、普通の人にはそんなものなんの価値もない。盗まれるのは金目のものなのである。

「まあ、そういう不安症があることを専任の先生に話しておくことですね。」

「でも、そんな不安、わかってくれるでしょうか？」

「大学の先生なんかだったら、わかってくれますよ」

その弁護士さんは大らかで、楽天的な人みたいだった。

あれから15年が過ぎた。その間に、強迫症はだいぶマシにはなった。しかし、まだ完治してはいない。俺たちみたいな非常勤講師は、いくつかの大学で仕事をもらって生活をしていく。こういう生活を始めて、もう23年が過ぎた。非常勤であることに不満はない。非常勤でいいんだと割り切って生活してきた。専任に比べて収入が少ないのは仕方がない。しかし、何よりも怖いのは、非常勤は一年契約の更新なので、常にきちっと仕事をしなくてはならない。ミスやトラブルが起すわけにいかない。その心配と闘いながら、俺は20

年以上もの月日を生きてきたため、俺は常に絶望的な状況を想定し、予防線に予防線を張って仕事をする習慣がついてしまっているのだ。

俺はよくいえば、真面目だ。しかし、真面目すぎて、自分を追い詰めてしまう。これはネットで調べたところ、自己肯定感の欠如のせいだと書かれていた。確かにそうだ。俺には自己肯定感がない。全然、自分に自信が持てない。だから、常に人の顔色を伺い、些細なことでも怒られるのではないかとおどおどしながら生活している。それは俺が少年の頃に大きく人生に躓き、誰からも理解してもらえない日々が長かったせいだ。

小学校の高学年からジェンダーの問題に囚われ始めた俺は、その後急下降の人生を歩むことになる。俺の人生を折れ線グラフに例えればV字型である。そして、左よりも右のほうが長い変形V字型だ。Vの尖った部分、すなわち俺の人生のどん底は15歳の時にくる。この時、俺は心が壊れたのだった。それから少しずつ這い上がってはきたのだけれど、その上がるスピードは遅すぎて、ほとんど平に近い斜めの上昇カーブにすぎないのである。だから俺は、普通の人が普通にしていって、年相応のことをまったくできずに生きてきた。そのことが俺の自尊感情の低さにつながっている。

38歳の頃だ。ある不登校のNPOに少しだけ参加した。すると、そこの女性からは、「國友さんの表情を見て思うことは、だいぶ立ち直ってはいらっしゃるけど、まだ完全には吹っ切れてはいないというところでいらっしゃるのではないかしら」と言われた。その通りだった。38になっても、俺の人生はまだ不登

校が重く影を落としていたのである。これだけ長く苦しんできた俺は、様々な葛藤を抱えながら、苦しみ抜いて生きていた。

しかし、普通の人にはそれをわかってくれない。俺は天涯孤独なのだ。

### 3. 異性はわかってくれない。

孤独であることはおおっぴらに言わないように気をつけている。俺が孤独だということをもらすと、人によっては、俺が結婚していないからだ、女性がいないからだという解釈をしてしまう。カップル幻想、結婚はすべきものという幻想に依存している人はまだまだ多い。

そうじゃないのだ。俺が結婚しない、女性とつきあわないのは、どっちみち理解してくれないことがわかっているからである。

*Not Gay*という電子本を読んだ。アメリカのレズビアン女性の学者が書いた本なのだが、彼女は元々がレズだったわけではなく、若い頃は男性とたくさん付き合っていたのが、どうしても男性に違和感を抱く部分があって、ある時、ふとしたきっかけで、女性と関係をもったところ、その関係がとてよかった。それがレズに転向するきっかけだったというのだ。男は無意識に女性を差別するようなことを言っている。女性の感情に鈍感なことをしている。ジェンダー・センサティブでない女性だったらそれくらいのことは気にしないのだが、ジェンダーに囚われている女性は、些細なことに激しく反応し、男との関係が結ばなくなってしまう。

俺はこのくだりに共感した。俺は彼女の男バージョンである。俺は、この連載に書いて

きたとおり、男の人とゲイ関係になったことはないが、男同士の友達の方が心地いい。女性は無意識に男を差別することを言っている。男の感情に鈍感なことをしている。もちろん、男性でもジェンダーに鈍感な人はいるのだが、同性の場合は、自分と同じ宿命を背負ったもの同士だからまだ許せる。しかし、女性から言われると、「女のあなたに、なぜ、男の苦しみがわかるんだ！」と俺は激しく反発してしまうのである。

### 4. 『さよなら溪谷』

『さよなら溪谷』(大森立嗣監督・2013)は、やや、観念的な話であることは否めない。真木よう子が出色の演技で、この年の主演女優賞をいくつも受賞したが、複雑な設定の映画である。彼女が演じるヒロインは、高校生の時に野球部の連中に集団レイプを受け、そのトラウマで、男との関係が上手くいかず、自殺未遂や失踪を繰り返し、今は、自分をレイプした男の一人である尾崎(大西信満)と暮らしているという設定である。ストーリーは、尾崎が殺人の容疑をかけられ、尾崎に関心をもった記者(大森南朋)が解き明かしていく、ちょっとしたミステリー仕立てとなっている。

この映画で、記者の部下の女性(小林杏)は、「自分をレイプした相手と一緒に暮らすって私にはわかりません。でも、その場合だとバレる心配がないんですよ。いつもオドオドする必要もないし……」と述懐する。なるほど、レイプされた過去を十分知っている相手だから、隠し事をしなくてすむから楽な面もあるのだ。

確かに、そうだ。俺の人生に重ね合わせる

と、俺はずっと自分が不登校だという過去に触れられるのを恐れて生きてきた。俺が博多の大学にも受かっていながら、京都の大学に来てしまったのは、一つには過去を消したいという思いがあったからだ。しかし、その一方で、博多の大学だったら、俺がいじめられっ子で不登校になったことを知っているやつも何人もいたから、バレることを恐れてオドオドすることはなかったのかもしれない。俺は、過去のことは全て九州の風土のせいにして、京都での新生活をスタートさせようとしたのだが、俺の大学生活は偽りのアイデンティティの上に築かれたものだったため、うまくは行かなかった。俺の人生の最大の事件（トラウマ）イコール俺のアイデンティティであり、それを隠蔽した形で生きることは、つねに何かが胸につかえているという状況だった。こういう状態で、楽しい人間関係が築けるわけはなかったのだ。

『さよなら溪谷』のヒロインは、尾崎と暮らしながらも、時として彼のことを激しく責める。「私たちは幸せになるための結婚ではないのだ」という台詞も出てくる。尾崎は罪を悔改めようとしているが、むしろ、彼女はそれを断固として認めない。「あなたを私以上に不幸にしたい」というのも彼女の本音であり、彼女は彼を苦しめたいのである。彼女が彼と暮らすのは、彼に罪を忘れさせないための復讐である。彼女は常に彼といることで、「あなたは加害者なんだ」というメッセージを、彼に突きつけ続ける。

この気持ちも俺にはよくわかる。俺は今でも、自分を苦しめたやつを許していない。許してしまったら、俺のこれまでの人生はなんだったのか、トラウマに苦しみ続けた人生は

何だったのか、その意味がわからなくなってしまふからである。俺は過去に囚われているので、「いつまでも過去のことを反芻していたら、憎しみが大きくなっていくわよ」と言われることがあるのだが、反芻とは牛など動物たちが消化吸収するためにすることであることを思い出して欲しい。トラウマを背負う人々が、トラウマが大きくなるとわかっているながらも、反芻をやめられないのは、過去を消化吸収できないからなのである。その体験が忌まわしいものであるほど、反芻は延々と続いていく。トラウマの厄介さはそこにある。

こう考えてくると、『さよなら溪谷』のトラウマの描き方は極めて秀逸である。

と思いつつも、男の俺は、俺のほうがもっと不幸だと言いたくなる。この映画のヒロインと俺が違っているのは、俺のトラウマはまだ認知されていないということである。女性がレイプされるということは、最大級の女性差別であり、トラウマとして認知され、加害者は、殺人と同等の重い罪に処される可能性もある。しかし、男性ジェンダーで苦しみ、女性に凌辱され、男としてのプライドをずたずたに傷つけられた俺の苦しみは、まだ社会が認知しない。去年だったかネットに、30年ほど前の少女時代に性的虐待を受け、その後、精神障害者となった女性の訴えが認められ、魂の殺人として、相手の男に多額の慰謝料を払う判決がだされたという記事が出たことを記憶している。俺は、40年前に自分の魂を殺された身だが、俺が訴えても、慰謝料請求は認めてはもらえないだろう。

これを言うと、「男性被害が認められないのは、男性の被害者は女性に比べると少ないから仕方がない」と反論されるだろうが、少な

いからこそ、当事者のトラウマは余計に重くなる。同情してくれる人、理解してくれる人がそれだけ少なくなるからである。そして、男の被害が目の目を見ないのは、「男は被害者になるべきではない」という抑圧がまだまだ強いからなのである。その抑圧がなくなれば、被害をカムアウトする男性はたくさん出てくることは間違いないのだ。

## 5. スポーツマンとナード

まだまだ男性被害を正面から見据えた映画が出るのは先のことになるだろうが、『さよなら溪谷』がいいのは、男を完全な悪者には描いていないところである。

記者の男と部下の女性との間で次のようなやりとりが出てくる。「被害・加害という単純なものじゃないんだ」という男、「加害者に共感していませんか」という女。

この記者の男は、元々はラグビー部でならした男である。しかし、今となっては、妻とも上手くいかず、身体もすっかりたるんでしまっている。映画の序盤で、妻と喧嘩をした後の彼が、服を脱いで、自分の裸を鏡に写してみる場面は、一つの象徴的な場面だ。

彼は、かつては野球部だった尾崎に「スポーツしかやってこなかった人間は、やめると何もなくなっちゃいますよね」と語りかける。どこかしら、彼に引かれ、共感するものを感じているのである。また別の場面で、部下の女が、「でもなんでなんででしょうかねー。運動部ネタって、さわやかネタか、集団レイプ事件、その中間がないっていう」と語る場面があるが、これは男にはピンとくる。

スポーツができなかった俺は、体育系の男

が羨ましい。彼らは爽やかだし、目標がはっきりしているし、他の男たちと熱いホモソーシャルな絆で結ばれているので、なんとも男性的な魅力がある。

しかし、こういう男ばかりが集まると、男性性が高まって、男集団のモビングが起きる。集団レイプ事件が起きるのはそのせいである。男からしてみれば、男が女とやりたいと思うのは当たり前のこと。集団になると気が大きくなるし、その時の勢いでやったこと。女性を凌辱しているとまでは思っていない。しかし、女にとっては、それが深刻なトラウマとなり、そのせいで、その後の男性関係まで、うまくいかなくなっていくのである。

俺はこの逆バージョンの男だ。この連載で何度も書いた通り、俺は女の子たちからモビングを受けた。おそらく、俺にモビングをして、俺の魂を殺した彼女たちは、俺のことなど覚えてもいない。その時の感情にまかせてしたことで、それほど深い思いはないのだ。しかし、俺は、そのことに深く傷つき、その後の女性関係が上手くいなくなってしまった。おまけに俺は男だから、誰も同情も理解もしてくれない。

また、この映画では、かつてはスポーツをしてきた男のしょぼくれた姿が描かれる。その部分も注目に値するところだ。

これはアメリカ映画だが、『ナードの復讐』（ジェフ・カニュー監督・1984）というコメディがある。ナード (nerd) とはガリ勉やオタクっぽい男性のことを指す。この映画は、大学を舞台に、大きなメガネをかけて、青白い、ナードたちが、マッチョで体格のいい体育系の連中からいじめられ、それからコンピューターを使って復讐していくという物語で

ある。今の社会では、肉体的な力よりも知性が尊重されるため、むしろ、ナーズのほうが社会的にはエリートになる可能性が高いのだが、男性的魅力という部分で体育系のほうが数等上であり、そのことがわかっている彼らはナードたちを馬鹿にするのだ。アメリカはとりわけマッチョの伝統が強いというせいもあるが、日本でも同様である。現に俺は、勉強はできないわけではなかったが、スポーツができなかったがゆえに馬鹿にされ続けたのだから。

今でも、覚えているのは、中学に入る時の従姉の何気ない言葉だった。「文化部に入りたい」と思っている俺に、彼女はいうのだ。「男だからねー。スポーツに入ったほうがいいわよ」若い女性たちは見た目の格好良さだけで男を見ている。昔から映画では、「女は娼婦男は軍人」と言われる。すなわち、女優は娼婦を演じた時が一番輝いて見え、男優は軍人役の時に最も魅力的に見える。娼婦と軍人というのは、究極のジェンダーであり、だからこそ性的魅力があるのだ。

『さよなら溪谷』では、レイプされる女が娼婦、運動部の連中が軍人を敷衍させた形である。レイプされる女も運動部の連中も究極のジェンダーの姿だからである。そういえば、ポルノやアダルトビデオでもレイプは頻繁に描かれる。レイプされる女は魅力的だから、レイプしてもいい、そういう考えが若い男の子たちの幼稚な脳裏にあったとしたら、それは大問題だが、その一方で、スポーツができる男のほうが魅力的・カッコいいと、ナードを馬鹿にする若い女性も問題なのである。

スポーツマンを否定しているのではない。しかし、それを間違った形で礼賛するのも問

題。過度の男性性は支配へとつながっていくからである。

この映画は、ヒロインが置き手紙を残して去った後、かつてのスポーツマン2人が、しょぼくれた様子で、よりそうところで終わっていく。俺のことを深く傷つけた中学時代の体育教師は、今、どこかで苦しんでくれるだろうか。俺の心を傷つけたことに気づいてくれるだろうか。そんなことを考えた。

加害者になるにせよ、被害者になるにせよ、どっちにしろ、男は痛し、です。